2 京都帝国大学新聞関係記事

1 既に三百名突破　海軍予備学生志願殺到

一九四三年六月二〇日

空の決戦はいよいよ激烈化してきた、山本元帥の壮烈な最期、アツツ島に恨をのんだ山崎部隊の勇士、この苛烈な事実の前に我等学徒は等しく敵米英撃滅の信念を固めたのだ、しかも敵米国では飛行士の大半が学生出身で彼らは不遜にもわが皇軍に挑戦してゐる、学生諸君、航空隊に来れ、この声に応じてわが学徒の関心はいまや南太平洋の大空へ、仇敵必滅の敵愾心に燃えてゐるのだ、本学においても、海軍予備学生の志願者が毎日事務室に殺到してゐる、すでに志願書類を受取つたものは現在までに法学部一六〇名、経済学部七〇名、文学部二〇名、農学部二三名、工学部三〇名、理学部一〇名で七月五日の締切までにはまだまだ殖えるであらう、各学部とも願書とり寄せに汗だくである、ともかく現在でも総数三百を超える本学生がみな山本元帥の遺志を継ぎ、太平洋の大空に散華した先輩に続かんとする意気に燃え、米空軍に見ゆる日を今や遅しと待つてゐるのだ。

2 防空訓練　元気一杯に活躍　七月十五日から三日間

一九四三年八月五日

本学防空訓練は既報のごとく七月十五日午前七時四十分訓練警戒警報発令を以て開始、法学部、経済学部の報国隊員一千余名の学徒が出動、本部玄関前に配置された下鴨署の二台の送水車の援助のもとに学内各所に烈日もものかは夏休み返上の意気高く元気一杯敢闘精神を発揮したが同日附属病院において午後三時から本格的な防空救護綜合訓練を実施、病院特設防護団員は鉄兜防毒マスクもいかめしく配備につき五百名の看護婦を以て組織された救護特練隊も活躍午後四時半頃好成績裡に訓練を終了した

翌十六日は、医学部、工学部、医専、十七日は文学部、理学部、農学部報国隊出動、十五日同様の訓練をくり返し、かくて三日間にわたる訓練を終了常在戦場の精神を遺憾なく発揮し、国土防衛の益々堅きを思はせた

3 のべ七千名を動員　九月の報国隊勤労出動

一九四三年九月二〇日

本学報国隊は七月中に防空訓練を実施し、学園鉄桶の陣を堅めるとともに、ついで公共待避壕構築のため出動、泥と熱汗にまみれて予定以上の作業量を示し、好成績を収めるところがあつたが、現下の緊迫せる戦局は試験終了後と雖も直ちに報国隊員の出動を要請しこゝに九月中にのべ約七千名の動員を行ひ、草刈作業と薪運搬作業に出動することになり薪運搬作業はすでに六日から十二日にわたり実施されるところがあつた

草刈作業　本作業には約五千五百名の動員が行はれる予定で十八日（土）から二十二日前五日間実施されるが、十八日は法、経の一、二回生、十九日は同じく法経一、二回生、二十日は医学部一、二、三回生及び理学部一、二回生、二十一日は工、理、農学部一、二回生、最終日は医学部一、二、三回生、工、農学部一、二回生となつてをり、各日とも八時三十分新京阪桂駅前広場集合、乗車券は新京阪四条大宮改札口で交付される、雨天の際は順延されるがその旨を本学および新京阪四条大宮駅入口に掲示されることになつてゐる、場所は府下

乙訓郡大枝村、事故あるものは前日までに各学部事務室あて届出を要し、病気のものは医師の診断書を添付すること、弱体者は免除されるが、ともかく各学部二回づつの出動となつて次第に強化されて来る状態にあるが経済学部では外国人留学生に対しても特別の場合を除き参加せしめ、以て同甘共苦を実践することになつた

薪運搬　本作業は六日（月）から一週間実施、十二日好成績を以て終了したが場所は三ヶ所に分れ府下船井郡下和知村、南桑田郡保津村、同東別院村、各日共七時四十分二条駅前集合目的地に向ひ午後五時過ぎ二条駅着帰学したが学生食堂でもお腹を空らした出動員のため特に営業時間を延長して大いにつくすところがあつた、出動人員は文学部、医専の約千三百名

六日は下和知に医専一回生東別院に医専三回生と二手に分れて出動、七日も同じく二班に分れ文学部史学、文学科一、二回生は下和知、医専二、三回生は保津、八日も同様文学部哲学科一、二回生は下和知、医専一、二回生は保津、九日からは下和知のみで九日文の史、文学科一、二回生、十二日の最終日は文の哲学科一、二回生であつたが未来の文学者、哲学者達は営々として五キロの山道を運搬きびしき残暑のさ中で勤労の深い歓びを体認するところがあつた

4　開墾、草刈に出動　報国隊増産推進に輝く成果

一九四三年一〇月五日

現下戦局の要請は学徒の勤労奉仕を益々要請し□さきに夏休中にもかかはらず薪運搬に出動した本学報国隊はその□引きつづき十八日から二十二日まで乙訓郡大枝村京都農林学校実習林で利鎌を振つて草刈奉仕を行つたが各日とも午前八時半新京阪桂駅に集合して現地に向ひ約五時間にわたり行学一体の境地に徹して聖汗にまみれ毎日約三万貫の大収穫を得て午後三時半作業を終了した、大枝村当局でも各部落から責任者を出して指導にあたり、且つ一家一人づゝ及び女子青年、婦人会幹部らも出動協力するところがあつた

ついで報国隊は京都府、京都市の要請に基き二十一日から三十日まで大徳寺裏の二千七百坪の竹藪開墾に出動したが、同竹藪は従来から開墾を要望されてゐた土地で本学報国隊の手で見違へるやうに開発、増進推進の輝かしい役割を果たした

八木学生課長も戦闘帽、巻脚絆の凛々しい姿に例の温顔を見せて参加、隊員とともに鍬を揮つた尚出動割当は第一日法一回生、第二日法二回生、第三日経一回生、第四日経二回生、第五回工一回生、第六日工二回生、最終日は農、理の一、二回生であり今回も前回同様厳重な出欠がとられた

5　本学決戦体制　教練、行軍に重点　出陣に備へる健兵教育

一九四三年一〇月二〇日

秋漸く深くして学徒出陣のとき迫る、君国の大事に従容祖国の難に挺身する約〇千の本学学徒の入営を前にして本学当局では来る廿五日から来月五日までの徴兵検査期間をのぞく五週間の期間をこの際最も有効適切に活用すべくかねがね羽田総長を中心に関係各学部長、教授、学生課、同学会など慎重協議中のところ遂に九日結論に到達、この十三日（水）から法経文および農の一部は一斉に午前中を講義によつて、午後は講義を全廃して心身の錬成に邁進、心身両面よりする十全なる入営準備を行ひ緊急事態に即応することとなり、さる十一日（月）には各学部ごとに学部全学生を一堂に会し学部長から今回決定をみた教育体制の戦時切替への真精神及びこれに対する具体的措置を詳細に説明、全学一致学徒に与へられた輝かしい栄光に副ふべく誓ふところがあつた、その要点をあげると左の通り

先づ法、経、文および農の一部は授業は午前中のみ、午後はこれを錬成にあてる、十月一日から開講の午後の講義はさる十二日を以て一応打切り、これを適当に按配して午前に切換へを行ひ、学部別、学科別にそれぞれ教授の自由裁量によつて一年ないし三年間に修得せらるべき学科を五週間に圧縮その精体を把握せしめる、一方錬成は主力を軍事教育にあて、時間割は従来毎週一回二時間のものに毎週一回四時間（連続）を加へ従来の三倍量とし、戦技訓練を加味、同時に学生を健康状態によつて甲乙丙の三段階に分ち、それぞれ適切なる指導を行ひ、行軍錬成については学部別に教官総動員のもとに学生を引率、従来欠けてゐたとみられる行軍力養成のため教官、学生一体となつて戦闘隊形を以て強行訓練を展開することに決定、法学部はさる十二日、経済学部は十三日、文学部は十五日、農学部の一部は十八日からそれぞれ実施、まづ法学部では教授、助教授等指導のもとに午後一時から護国神社上賀茂神社に参拝、一方一部に体操実施、植物園におけるグライダー練習を大雨にあらざるかぎり実施、雨天の日は教室にて入隊に必要なる事項に関する講義を行つた、経済学部でも十三日午後一時から谷口部長統轄のもとにまづ行軍要領を与へ終つて上賀茂、護国の両社に参拝行軍を行つたが、はじめは緩慢に、後は次第に強行軍といふ趣旨で行はれ、到着地において出席をとり、不参加者はあらかじめ正規の届出を要するなど厳重な行軍錬成を秋晴れの空のもとにくりひろげ、雨天の日は法学部同様教室で教練の講義を行ふところがあつた

6 志気昂揚に邁進　十九日「征途に誓ふ会」挙行

一九四三年一〇月二〇日

一方学生課、同学会主催になる試みは出征する〇千の学生を対象として企画され綜合的にあらゆる角度からみやびやかにして逞ましい武士道精神をより一層戦ふべく後援会、祈願祭、戦技訓練等の行軍を予定してゐるが、すでに善波氏の講演「征途に誓ふ会」などを以て発足した

十七日は同学会主催の桃山石清水八幡における祈願祭が執行されたが、この日午前八時石清水楼門に参加者五百名参集、それより神前にすすみおごそかに征途に出で立つ決意を報告、武運長久を祈願して桃山まで約十粁の間を意気揚々として行軍、正午ごろ解散した

学生課主催のもと、十八日午後三時から法経第四教室で例の「弾巣」で一躍読書界に知られるにいたつた文学部善波周講師の「征で立つ人に」と題する講演が行はれた、の身体（ママ）氏は氏の生命の息吹そのものともいふべき深い体験談を今や晴れの入営を待つ満堂の聴衆に向つて諄々として、語るところがあり戦闘精神と深い思索が美事に結合され、後輩への暖い心づかひの言葉を以て五時頃会を閉ぢた

学生出征を記念すべき同学会主催「征途に誓ふ会」は十九日午後六時半から法経第四教室で開催

先づ国民儀礼の後羽田会長の壮行の辞に移り、会長起つて出征学徒の武運長久を祈り米英撃滅に邁進せんことを希望

ついで入営生代表法三回生島田政雄君、征で行くものの牢固たる決意をつげ、これに対し在校生代表として農三回生平泉鎮君心からの送別の辞を述べ、終つて「大東亜戦の意義」と題する高田保馬教授の講演に移つた、最後に全員「海ゆかば」を斉唱、解散した

学生課では川田順氏の来学を乞ひ来る二十一日（木）午後三時から法経第四教室で特別講演会を開く、大住友の柱石として縦横の活躍をとげた同氏は又歌人として烈々の気概を詠じ、その作品に対しては昨年帝国芸術院賞が授けられた、征途に上る学徒のために、今回はとくに「生死と歌心」といふ主題がゑらばれた、国難に赴く学友への心の糧として多数の参会が予想せられてゐる

又恒例の尊攘堂大祭の記念講演として一方松陰精神の明確な把握を意図して学

生課では吉田松陰に深い理解と造詣とを持つ広島高等師範学校の玖村敏雄教授を聘してその蘊蓄をきくこととなつた、この特別講演は二十三（土）午後三時から法経第一教室で行はれ、席に余裕のあるかぎり学外からの傍聴も許されることとなつた、主題は本項締切までには未定であつたが松陰精神の精髄が語られるものと期待せられてゐる

7　出陣学徒を送る壮行式を挙行

一九四三年一〇月二〇日

日を逐うて苛烈を極める決戦場に今や一挙〇千の精鋭をおくる本学ではその出陣の門出を飾るべく来る十一月中旬よき日を選んで壮行式を挙行する予定であるが、学校側の主催になるか同文会（学）主催になるかは目下のところ未定である、なほ同壮行式には学内教授の講演も行はれるもやうであるが只今詮衡交渉中であり、その他の細目についても関係者の手もとにおいて立案整理中である

8　征く学生におくる　嘘の言葉――入隊の真義を自覚せよ――

田辺元

一九四三年一〇月二〇日

学生諸君の大半は今や大君の御盾と召されて戦の地に征かんとする。来るべきものが遂に来つたのであるとはいへ、感慨無量である。私達は先づ何よりもさきに、私達に代つて君国の為に前線に出動せらるる諸君にその労を謝さなければならぬ。諸君はすべてかねてから今日あるを期し、今更死生の問題に迷ふ所なきこといふまでもあるまい。併し私達は、諸君が武運芽出度く無事に一人残らず復び学園に帰り来らるることを心から祈るものである。

顧みるに、幾十万の学徒が挙つて国難に赴くといふことは、我が国開闢以来未だ嘗て無き所である。これはその意味する所実に重大にして、影響する所真に測るべからざるものがある。若し之を以てただ軍隊の人員補充に学徒を徴集するといふだけのことと考へるならば、それは大変な間違ひである。文科系統の学府を事実上一時閉鎖するといふことが、一国の文運に及ぼす影響の大なるはいふまでもない。総力戦の要素として不可欠なる思想法制経済乃至文化教養の側面に対する人的補給を、一時たりとも停止することの重大なる結果を齎すべきは、少し考へれば明白なことである。併し斯かる犠牲を敢てしてもなほ、文科系統の学徒を全部召集することが、今日国家の必要とする所である以上は、これに対してとかくの批評を加へることは国民の慎むべき所でなければならぬ。私は今斯かる事を論じようと欲するのではない。ただ諸君に、諸君みづから諸君の応召出征の意味を考へて頂きたいと希望するだけである。

諸君は我国民の最高知能たること言ふを俟たぬ。諸君は国の知能を代表する者として軍に入られるのである。而して軍に入るのは単に兵卒となる為に入られるのではない。幹部候補生となるべく入られるのである。然もそれが唯少数の補充として入隊せらるるといふのではなく、大量の幹部候補生として勤務せられ、やがて自ら幹部将校となり兵卒を率ゐて第一線に立たれるといふのである。想ふに其結果として軍はその如何なる末梢にまでも諸君を幹部として編み込み、諸君は軍の下級幹部を全般的に充実せられるに至るであらう。これは実に重大なる意味を有することでなければならぬ、既に事変発生以来学校出の幹部が軍の為に貢献する所大なるものあり、所謂インテリ出身の下級将校が軍に於て独特の能力を発揮し有用の任務を遂行して、軍に不可欠の人として重きをなす、といふ話は久しく私の伝聞する所である。此話を耳にして私は当時動もすれば知能を軽視し、学問教養を有害無用視して二言目にはインテリを攻撃し、学生を以て時局を弁へざる非国民の代表であるかの如く罵詈する風の少なからざるを憤慨したものである。今や時局は学生諸君の力を要すること愈々大にし

て、遂に諸君の大半が即時軍の幹部候補生となる為に入隊せらるゝ所まで来たのである。斯くて諸君は今後知能を軍の随処に浸透せしめらるること必至であるといはねばならぬ。今日総力戦としての戦争が単に狭義の戦闘に尽きるものでなく、知識と技術とを徹底的に動員するのでなければ最後の勝利が期し難いばかりではなく、更に戦闘の効果を積極的に発揮するためには現地異民族に対する宣撫指導の文化工作から軍関係の人々の日常生活の倫理化に至るまで、深き思想と高き知能とを以てこれを裏附けなければならぬことが既に一般の常識となつてゐる際、諸君入隊の意味が如何に積極性を有するかは縷説を要しないであらう。諸君が軍に入らるることは必然に軍の知能化を意味すること疑ふ余地がない。

但し誤解を防ぐために特に注意を願ひたいのは、私は諸兄に軍を知能化する目的で軍にはひらるるべきだといふのではないことである。私はただ必至なるべき自然の結果を語つて諸君の自覚を促すのみである。諸君は軍に入つて何よりも先づ皇軍の精神を学び取りその鍛錬を身に附けなければならぬ。本来皇軍の精神は国民精神の開花した精華に外ならない。軍人として日本精神を体得するのは、日本人が日本人となる関門といふべきものである。諸君は此関門を通過し、特に国家の殊遇に報ゆる為に、幹部候補生としての重責を自覚して、率先死生の関頭を突破し、死するも生くるも唯大君の御為といふ皇軍の精神を実践しなければならぬ。斯くて完全に軍の要素となりきることにより諸者(君)はおのづから軍に知能を浸透せしめるのである。これは軍そのものにとつてもまた、その生命の永遠を確保する為に不断に自らを新にする所以に外なるまい。此の如くにして諸君は、国と神とを相合する人としての　大君の御業に奉仕して、国家永遠の生命の創造に参与する。これは真に無上の光栄ではないか。諸君、願はくば、此光栄を自覚して、勇躍召に赴き戦に征かれんことを。

9　いざ征かん、決戦場へ　征途飾る多彩な行事　二十日壮行式を挙行

一九四三年一一月五日

臨時徴兵検査も本日を以て終りをつげ、学徒の決戦の庭に征て立つ日もあと余すところ一ケ月足らず、決戦の様相は日を逐つて苛烈を加へ、今や学徒部隊に□される□みは大きく、征く学徒の責務は一段と重い、十二月一日入営を控へて本学では既報のごとく行軍□□□に重点をおく健兵□□に□□するとともにまた学術の精□を与へんとする多彩な催しを企画いづれも所期以上の成果を収めて来たが、□□の本学主催学徒壮行式はいよいよ来る廿日午前八時から農学部運動場で、挙行と決定、当日は羽田総長の大詔奉戴、式辞に続き入営学徒と在留生との間に決意を交換、ついで同学会から全入営学徒に石清水八幡宮の御守を渡し、終つて分列行進にうつり、「海ゆかば」を斉唱、最後に総長の発声で万歳を奉唱して閉式、それより入営学徒は在留生の歓送のうちに平安神宮に参拝、必勝祈願祭を執行することになつてゐる

なほ、同学会、学生課ではひきつづき入営学徒のために講演会、座談会等を開くがその詳細は左のごとし

記念旗掲揚式

□□、学園と前線とを結ぶ楔にと出征学徒が学園に□して征く出征記念旗は、その調整をおはつたので、来る八日、大詔奉戴日を卜して、同学会主催のもとにその掲揚式が挙行せられる、当日午後零時三十分西部構内の池の畔掲揚台に各員参集国歌斉唱の裡に意義深い大国旗は竿頭に掲げられ、秋晴れの大空にはためくこととなるであらう

征くも留るも、この旗を通じて学友としての結盟の心を新たにするために多数の参会が期待せられてゐる

能楽鑑賞会

同学会文化部が征くものに対する□□な□□とその裏に結ばれた美はしい感□

の□□がある―文化部では金剛巌氏を煩はしてその□□の下に能楽講座を開設の後、金剛能楽堂で同氏による能楽「三井寺」の上演を以て研究会を開いたのは去る五月のことであつた、同部ではその時の異常な感銘の忘れ難く征く前に今一度の折をとひそかに切望してゐた、このほど山田甫委員が思ひ切つて金剛氏をお訪ねして至情を打明けたところ、同氏はその□□に深い感動を示され「私の能が征く学生諸君に少しでもお役に立つならば喜んで引受けよう」と快諾せられ、一門を率ゐて本格的な上演をせられることとなり、特に能楽中の絶品「松風」が演ぜられることになつた。

シテ金剛巌、ワキ船越健一ツレ今井喜三郎なほこれには、最近同氏が入手せられた由緒ある古面が用ひられるとともに狂言「靱猿」が茂山社中によつて演ぜられることとなり、茂山千五郎、政治、真一、□氏らが出演する日時は十日夜と決定した、同氏のこの厚意に対し文化部は挙げて感激の中に目下その準備を進めてゐる。

記念演奏大会

同学会音楽部では、伝統と□□とに□く同管弦楽団の演奏会について□□考慮中であつたが、一期の思ひ出に本格的演奏を行ふ□が□り、時期の取計りに対する学校当局の了解も得られたので近々朝日会館に於いて定期特別演奏会を開催する運びになつた、これには映画部も合流し「空の神兵」のほかニュース二本、木村素衛氏の講演が行はれる一方西部構内の音楽部室では朝比奈隆、山田忠男氏ら先輩の指導の下に猛練習が続けられてゐる、期日は十一日なほこの催しは非公開として、入場は本学教官と学生とに限られる

鈴木大拙氏講演

同学会文化部ではかねて鈴木大拙博士の来学を交渉中であつたが、征くものに対する心遣ひから、その時期を特に繰上げ同博士の厚意によつて来る十六日午後三時から、法経第四教室で、講演会を開催することとなつた

演題は未定とのことであるが、出征を前に博士によつて語られる至境については異常の期待が寄せられてゐる

南方座談会

臨時徴兵検査の終了とともに、学生課主催の□□座談会も再開せられ征くものも、残るものも、さらに明確な知識の□□と心構への完成に□せられることとなつた、その一は「南方を語る座談会」として先日ニューギニアの視察を了へて帰学せられた農学部梶田茂教授を中心として座談会が来る十日開催せられる、これには南方戦線から帰還せられた三谷軍医少佐も加はつて南方の風土気候等について貴重な体験が語られる筈である、場所は法経の演習室中の一つがあてられ時間は三時からの予定である。

今一つは文学部の木村素衛、西谷啓治、高山光男（岩）三氏を中心とする座談会であるが、場所日時は未だ決定してゐない、追て掲示を以て発表せられる

10　学園残留者は二割強　本学文科系学生の調査なる

一九四三年一一月五日

臨時措置にもとづき本学においても法文系学生の殆んど全部の入営入団をみるはずであるが、一方適齢前の学生、帰還、検査済みの者はあと一ケ年もしくは当分の間御召のある日を待ちつ学園にあつて学業を継続するはずで、このほど学生課において留学生を含めての残留者の調査が出来上つた

これによれば法学部においては一回生、三回生、二回生の順序で待機者（もしくは留学生）があり、全体で約一割九分強、文学部では三回生、一回生、二回生の順序で約三割強、経済学部においては一回生、三回生、二回生の順序で三割強、法・文・経の三学部全体では二割強の比率を示してゐる、もつとも農学部では停止学科不明のため調査未了だつたのでこの比率は変動あるものとみなければならぬ。

11 論説 学徒出陣に寄す

一九四三年一一月五日

今学生諸君は徴兵検査を受けてをる。そして文科系の人々の殆んど全部が間もなく応徴する事になつた。真に未曾有の事である。云ふ迄も無く諸君は、最初軍務以外の方面で国家に御奉公すべく、一身の方針を定め、それに向つて今迄努力して来たのである。それが学業の途中で予期せざる軍人として一死殉国の志を堅めるべき地位に置かれたのである。諸君の胸中に幾多の感慨が往来するのは、察するに余りがある。

しかしこれは非常時に於ける非常の処置の結果である。祖国が今直ちに之を諸君に要求するのである。火事が起つた場合、消防手ならぬ者も、何を措いても先づ消火に尽力しなければならぬやうに、国家民族の存亡の秋には、軍人ならぬ者も挙げて武器を執つて戦ふのが当然である。殊に平素国家社会から多くの特権を受け、教育を授けられて来た者には、かやうな場合に於ける責務は一層重い。これらの点に就いて、諸君の中に一点の疑を持つ人は恐らく無いであらう。実際私共の接触する学生たちを見ても、又新聞紙上で知る諸君の様子に拠つてもこの事には少しの不安も無く、却つて教へられるところの多いのを喜んでをる。

時局がこれ程緊迫しない時、世間にとかく知識階級とか学生とかの時局認識が足らぬと云ふやうな非難が多かつた。しかし私共は少しも心配しなかつた。今に真に彼等の蹶起が要望せられる時には、彼時は躊躇無く立ち上つて、最も勇敢に又有能に戦ふであらう。皇国の危急の場合之を救ふ力は却つてこれら学徒等から出るのでないかと考へてゐた。そして其予想が今実証せられようとしてをるのである。

私にこの自信を持たせる動機となつた事の一つは、自分の所属の教室の若い職員や学生で、応徴応召に依つて軍務に就いた人々の、軍人としての成績が、殆んど残らず極めて良好で、特賞を得た者、抜擢昇進に預つた者などが頗る多いと云ふ事実であつた。これは学徒としての訓練修業が、そのまゝ軍隊に於いても、大いに役立つた結果と見るほかはないのである。

学徒出身の兵員の数は、全体の一部にしか当らぬであらう。しかし彼等の多くは其の中で幹部級となる者である。それらの全兵力に対する影響は、決して軽視すべきではないと思ふ。ちやうど天秤が釣合ひを保つてをる時、一方の皿に小さな錘でも加はると、その方に強く傾くやうに、今相拮抗してをる両軍の勢力の上に、この学徒等のそれが吾が方に加はる事に因つて、戦局が急に有利に転廻し、これが結局吾が勝利に導く事もあり得る事である。私共はそれ程諸君に期待してをる。

前世界大戦後間も無く、私は欧州に往つた。そして戦時の事を色々聞いた。その中に当時の英国では、若い男を往来で見るのは稀で、多くは不具者であつた。屈強の若者がたまに居ても世間の冷眼の前に居たたまれぬ程であつたとある。そして同国の大学などを訪ねた際、講堂などの壁面一たいに彫られた学友中の戦死者の名を屢々見たのである。

又支那事変の最中、前線から帰還した教室員の一人の話に、中支の或処の戦で、一つの小山の陣地に拠る敵の一団があり、それが頗る頑強に抵抗した。周囲の隊が皆退却した後にも、それだけ残つて撃つて来る。皇軍の砲兵が此陣地に集中射撃をやつて、遂に山の形が変る程になつても退かず、終に殲滅された後で往つて見たら、それは正しく敵の学生軍の一隊であつたと云ふ。

又聞くところに拠ると重慶でも共産地区でも、抗戦を牛耳つてをるのは、知識階級なり学徒等である。大本営報道部員の発表にも、米軍飛行機の搭乗者の九割迄は学生上りだと云ふ。敵国側でもこれ程学徒等が戦線で活躍してをるのである。今諸君の出陣は真に当然であり、又時機でもある。諸君は愛国心ではもちろんの事、体力訓練、技能何れに於いても敵国の学徒に劣るものではないに違ひない。今祖国同胞が諸君に期待するところは頗る大きい。皇国の運命は

真に諸君の双肩に係つてをると云つても過言でない。心より諸君の自重健闘を望む。

駒井卓

12　征く学生におくる　歴史的使命に生きよ

牧健二

一九四三年一一月五日

大東亜戦争の成敗如何は、日本の興廃と亜細亜の将来とを永遠に決定する。然るに此の戦争を勝ち抜くが為には、前途に測るべからざる困難が予想せられる。

近時学生諸君が率直に此の歴史的現実を認識し、其中にこそ死生の途あることを覚悟し来つたのを見て、私達は大学の実□が此処にこそ、最も力強く働いて来たことを感得してゐた。ただ大学時代は学業の貴重なる完成期であるから、将来国家社会の指導者層たるべき人材の修学が、中途にして妨げられることのないやうにと、それをのみ祈つてゐたが、戦争は愈々苛烈を極め、猶予を許さぬ決戦期に入るに及び、遂に文科系の学生の適齢合格者に対して、即時入隊を命令されるに至つた。今日軍隊への入隊は明日前線への出動である。

私達は学業半ばにして遠からず征途に就くべき青春の学生達が、空高き秋の月を眺めつつ、何を感ずるであらうかと其の心中を察して、強く胸打たれる心地すらするのであるが、併し我が学窓の教へ子達が　大君の御召にあづかり、勇ましく門出するの日に当つては、先づ其の学生諸君の光栄を祝し、私達に代つて君国の為に出動する諸君の労に対して深く厚意を表し、□行を□□にせざるを得ないのである。

如何なる時勢にあつても、時代と人材とは不可分の関係に立つ者であるが、此度徴兵検査をうけ合格の上は直に入隊すべき学生は大正八年四月二日から同十二年十二月一日までの期間に出生した学生諸君であると聞く。処で大正八年は第一次世界大戦が終了した年であり、大正十二年は関東大震災のあつた年で、何れも最も印象の深い意義ある年であつた。諸君は出生の最初の時から歴史上における現代に属し、身心共に現代人として成長したのである。

世界が自由主義と共産主義と全体主義との三つの陣容に対立して第一次世界大戦以前よりも深酷な分裂を呈するに至つたのは、恰も諸君の幼年時代であつた。日本は東亜に於て一箇の独自の立場を有したが、満洲事変が突発した時は、恰も諸君が凡て小学校にゐた頃で、此頃から東亜の今日の形勢は固より、世界の第二次大戦の風雲が、年と共に急となり来つたのである。満洲国の建設、国際聯盟からの脱退、二・二六事件其他国内に於ける諸多の動揺を経て、支那事変となつた。

諸君の成長は皇国日本が、国際的にも国内的にも、肇国以来真に未曾有なる大転換期に突入しつつあつた時代に、之と歩調を共にしたのである。かくて昭和十六年十二月八日大東亜戦争の勃発を見たが、実に諸君の大部分は、皇軍が遠く南方の各地を占領した後此の京都帝国大学に入学したのである。さうして今や学業半ばにしてペンを捨てて銃剣をとり、遠からず前線に出動せんとするのである。

大学教育に対する今回の非常措置が、諸般の方面において影響するところは、極めて深刻甚大であるといはざるを得ない。此処には之に関することを述べる場合ではないが、諸君との関係においていふならば、大学は之に依つて一変したのである。昨年九月の卒業生から大学の門は軍隊の門へと連続した。本年九月の卒業生も同様であつたが忽ち一変して今や大学なる課程の中途に、兵営と戦場とが介在することになつた。諸君はその出生の最初から今日に至るまで亜細亜解放の大目的を有するこの聖戦に、献身奮闘するに足りるやう、終始心身を鍛練され来つたのであるが、その諸君の時から、大学がかくの如く完全なる戦時大学に変形したのは、決して偶然ではないのである。

軍隊と前線とは今や大学生活の一部になつた。その段階を経過することに依

つて、大学の課程が完成されるのである。従つて戦場に立ち弾丸の下を潜り、死生の間を往来することが、今後の大学を卒業するが為の条件となり来つた。此の事態は教授職にある私達に於ても、十分自覚さるべき事柄である。諸君を軍隊へと見送る私達は、同時にみづから自己を前線へと見送るやうな心懸であらねばならぬ。

諸君の中には三箇年以上此の大学にゐた者もあるが、本年十月の入学者の如きは僅々二箇月で大学を去るのであつて、思へば感激に堪えないものがある、併し高等学校を経過して養成された大学生としての準備には、既に根強いものがあるから、諸君はこれから、身はたとひ戦場にあらうともおのづから大学生の軍人として特色ある存在となることであらう。それだから諸君は真に皇軍の一員となり切つて、聖戦の為に思ふ存分活動して貰ひたい。諸君が　大君の御楯として雄々しく健闘することは、諸君に与へられたる歴史的任務に忠なる所以であり、大学はそれに依つて一段高く現代の大学たるの品位を高めるのである。切に諸君の健康と健闘とを祈る。

13　歴史と共に生く　原随園

一九四三年一一月五日

呼び出しの　声待つ他に　今の世に　待つべきことの　なかりけるかな

この程に　思ひ定めし　出で立ちを　けふきくことぞ　嬉しかりける

学徒諸君の心境は、この吉田松陰の二首の歌の如きものであると信ずる、しかし松陰のこの歌を詠んだ環境とは異つて、皇威八紘に遍く、雄渾なる大東亜建設の途上において、皇謨翼賛の大使命に向つて、その栄えある門出にあるのである。慶祝これに並ぶべきことはない。

事変以来、教室出身者を幾度か送り幾度か迎へた。その都度身に覚えたことは、学園と営舎とのつながりの接近であつた。学園の窓から兵営の門に通じた路は次第に縮められ、学園の窓は直ちに兵営の門と結ばれ、今や学園と営舎とは、一つ構への内に渾然として来た。軍服を身に纏ふか否かのけじめしか存しない。学徒の研鑽は銃剣を執らざる戦であつた。「死而後已の四字言簡にして義広し。堅忍果決、確乎として抜くべからざるもの、是を舎て術なき也」といふ精神の横溢した態度である。

此の精神は、筆執る場合も、銃執る場合も一にして不二である。願はくは、学徒諸賢が学園において堅持し陶冶された此の精神を、しかと胸に抱いて壮途に上られんことを切望してやまない。

今更、われわれが蕪辞をならべる必要はない。学徒諸君の心境は、遙かに清澄なるものがある。

本紙前号に出た目賀田守公君の「すぎし存命不思議と思はせ給へ」にはじまり「二十三のいのちに勃々たる征志をもえさからせる」感激に終る覚悟は、学徒諸氏一同の感懐であるに相違ない。

新三回生になられた諸君にとつては、大学の卒業を眼前に控へて壮途に就かんとするのであり、本省のとらんとする仮卒業の措置は、恐らく、諸君の父兄の心境に即応するものであつた。

しかし「自分は京都帝国大学の学生として出征したい」と洩らす学徒諸君の心中は、今迄の所謂親心、人情的思考を遙かに超えたものであつて、今迄の人情世界に出没するものを反つて反省せしむるのである。

それはひとり本学においてのみ然るのではない。某大学の学生代表の一人は、総長が、諸君の帰学の日を学園は待つてゐるといふ告辞に対しても「自分達はさういふ日のことを考へてゐない」と述懐してゐるのである。正しく呼び出しの声を待つ他に余念はないのであり、思ひ設けし出立を踊躍して受け容れるばかりであるのだ。

もろともに　明日の生命も　はからねば　今日を限りの　わかれとやせん

といふ、興亜の先覚者荒尾精の精神と相通ずるものを今の学徒諸君の魂の中に感得し得て、深き慶びを禁じえないのである。

かきくらす　亜米利加人に　天つ日の　かゞやく邦の　てぶり見せばや

之は、今次戦争に入つてから詠まれた歌のやうにみえる。しかし実は藤田東湖の詠ずるところである。吾人は、烈々たる神州の正気が、時間を越えて現在に輝くのを覚える。

真に皇国の歴史を身につけて味つた人にとつては、われわれの五尺の体は単に五尺の体ではなく、五十年の生命は単に五十年の生命でないことを悟つてゐるのである。われわれの全身は光栄ある三千年の歴史の結晶であることを知つてゐる。われわれの一挙手一投足が、直ちに三千年の歴史の動きであることの確信をもつてゐる。有限の肉身は此の歴史に没入することにおいて、天壌とともに窮りなかるべき皇軍を扶翼しまつるの金剛心を確立し、かくして皇国の歴史とともに永劫に活くるの実を挙げうるのである。朝に道をきいて夕に死すとも可なりといふ確乎不動の信念は歴史とともに生きるの精神に他ならない。

身はたとひ　武蔵の野辺に　朽つるとも　留めをかまし　大和魂

松陰の留魂、今、諸君の魂に躍動しつゝある。

心は高貴を師とし、素より立名なし

学業半ばにして征かるゝ諸君には、素より立名の意欲はない。一死奉公の尊貴なる心あるのみである。

野山獄中にあつてすら松陰は孟子を講じた。

「夫の檻輿牢獄の吏卒護従、罪囚の□居るものの若きは厚薄同じからず、頑良各異れり、然れども余が志気に感じて往々懇談を致し、余従ひて忠義を以て励ますれば、為に涙下るものあるに至る」

と松陰は述べて居る。

至誠の人よく人を動かすものあるとともに、一日生くれば一日だけ生の負託あることを想ひつつ生きとほしたる精神と気魄とは、また以て諸君の範とすべきところである。

学園に学ぶこと少きは月余、多きも二年を越えない。然し尊攘堂の存する学園に研修されし諸兄は、宜しく此の松陰の精神に生きぬかるべきである。悠々天地事、鑑照在明神の心を以て終始されんことを切望する（十月廿六日）

14　目指す全員志願　「半島学徒出陣の夕」開催

一九四三年一一月二〇日

先般、内地学徒同様志願兵として出陣の道が開かれ醜の御楯として今や勇躍戦線に赴かんとする朝鮮台湾の同胞学徒はこの廿日の締切を前にして一斉志願の態勢を整へて来たが、朝鮮当局においても志願せざるものに対しては休学の措置をとり、徴用の挙に出づることを発表するところがあつたが、過般来同胞学徒の出陣を意義づけるため朝鮮奨学会の学徒激励隊が大挙入洛、さる十一日午後六時半から楽友会館で「半島同胞出陣の夕」を開催、朝鮮奨学会側から理事長川岸文三郎中将、理事香山光郎氏、一方学徒側は本学、立命館、同志社に在学の半島学徒百余名が出席、川岸中将、香山理事はこもごも起つて激励、決議を行ふところがあつたが、当日出席の半島学徒のうち本学生十五名はただちに特別志願をなし他にも多数の志願者を出だし盛会裡に閉会

ついで十二日には奨学会総裁南次郎大将、川岸理事長をはじめ前建国大学教授崔南善、香山光郎、金季沫の三氏を迎へ午後六時からミヤコホテルで懇談会を開催、本学羽田総長をはじめ府下大学、高専側からも責任者多数出席、南総裁、川岸理事長から今回の特別志願兵制実施に関し一人残らず志願するやう協力方を依頼、羽田総長は出席者を代表して協力を誓ひ八時閉会した

一方台湾同胞学徒にたいしても総督府の意向を体し関西台湾協会が積極的に働きかけてをり締切りまでには全員志願をみるものとみられる

なほ本学朝鮮、台湾同胞学徒にして該当者は約〇〇名位とみられてゐるが学生課の手を経たものは〇名、この外直接中軍司令部へ志願したものもあり本稿締切りまでには大体〇〇名とみられてゐる

15 本学葵会結成式 十一日下賀茂神社で執行

一九四三年一一月二〇日

さる十月以来本学法経両学部有志を中心として皇城鎮護の武神賀茂別雷大神を奉賛する京都帝国大学葵会の設立が企てられてゐたところその準備は急速に進捗、去十一月十一日午前十一時から上賀茂神社において結成奉告祭が執行され、祭典後直ちに同神社参集殿で結成式が挙行されたが渡辺法学部長、谷口経済学部長等の顧問をはじめ全員出席して盛会であつた

かくのごとく大学において神社を奉賛する会の設立は全く従来なかつたことであり、注目をひいてゐる

16 理科系学生に望む

一九四三年一一月二〇日

勇ましく壮途に就く学友を見送つて諸君の胸中感慨無量なることと思ふ、実際我等も亦学業半ばにして懐しの学府、紺青の大空に聳り立つ時計台に別れを告げ、校門を出て征く文科系の学生軍を見送つて、諸君とともに自らを軍隊に送る思ひである。

一方文科系学生の入営措置が現時の戦争を勝ち抜くための非常措置であり、永遠に光栄ある東亜の建設への不可避の階梯であるのに、他方に於て諸君は理科系の学科を志したが故に入営を延期せられ、逸る胸を押し鎮めながら暫らく学園に止まり、直接戦力増強に必要なる智識と技術を修得することが要請されてゐるのであつて、止まる者も第一線に征く者も共に暫時の別れであり、又同じ心構へである。学窓に止まつて日々の研究が即ち聖戦完勝への途でなければならない。学校に止まることが「理科をやつてゐるもの」の「特権である」といふが如きは仮にも許さるべきでない。諸君各自が戦勝獲得に不可欠の智識と技術を迅速に習得し、光栄の日をまつことは勿論である。

ここに私は理科系教官の一人として、止まる諸君の注意を喚起したいことがある。諸君は固より速に専門の学識と技術に精通し、心身を錬磨し、以て遠大の目的への準備を為すべきである。それと同時に出で征く諸君の友人が残しておいたものをも考へ合はせねばならない。当路に於ても文科系の学問が現時の状勢に役立たないと云ふのでない。勿論これ等文科系諸学が大東亜建設に重大な役割を負担することを充分了解して居るのである。ただ日々に苛烈極める戦争の現段階に際会し、諸君の友人はペンを捨てて銃剣を執り、後事を託して出で征くのである。即ち彼等の課題であつた文科系の学問が聖戦の目的への寄与し得る限り、諸君に依託して置きたい気持ちである。固より是の事たるや理科系学生にとつて簡単でないことは彼等も承知して居る。文科系学識の習得の為めに理科系学生の素養において困難な条件が伴ひ、又限りある時間に文理両様の学習が殆んど不可能に見えることを否定しない。然し征く者が後事を託する心持ちを汲みとらねばならない。彼等は自分達の志した学問が国家に必要なる所以を思ひ、今日学習の中断によつて後日祖国に欠損するところあらん事を憂へるのである。

召されて大君の御戦さに征で起つた諸君の兄達が、止まる者に家の後事を託する気持ちを諸君が理解される筈である。「老ひたる両親に自分の分も孝行をして呉れ」と云ひ置く気持ちをしみじみと汲みとなつた人も尠くないと思ふ。何人分の孝行なんて有り得ない事だが、征く人の気持ちである。自分一人の事

でも中々忙しい現今、出で征く人々の分迄負担するのは容易な業でないのをよく承知して居るのである。然し彼等はその困難を要求して征つたのである。

学窓においても亦同じである。諸君は理学系統の学科を修得する多忙の裡に余裕もあらば、文科系の学科に対し関心を切望する。間もなく諸君も亦ペンを剣に代へる時が来るのである。その時こそ諸君の特殊技能が戦勝への加速度となるのであるが、同時に茲一両年学窓に止まる機会に諸君の心懸け次第で修得し得る文科系の学識が、祖国のお役に立つ機会のある事を思ふのである。諸君は一人二役である。今日文科系学生の思ひ残したるのを諸君の手で出来るだけ護る可きである—綜合大学の理科系学生が—。諸君に与へられたこゝ両三年に医者となり、又、理、工、農の技術者となると同時に諸君全体として法律学、経済学、文学等へ一層の関心をもつて貰ひたい。但し私は諸君に医学士、理学士、工学士、農学士たると同時に文学士、法学士、経済学士たれと云ふのではない。この短い時日にそれぞれの方面の卓越せる技術者になることが第一であり、之が為めには与へられた時間に非常な努力が必要である。然し同時に諸君が許される寸暇をもつて文科系一、二の学識の教養を積み、諸君の友人が思ひ残したものを継承する心懸けが必要である。八宗兼学の学僧を出した京都であり、七学部完備した京都帝国大学なのである。今や事態止むを得ずして吾が大学もその一半の学部の運行を殆ど停止せねばならない。しかもこれらの諸学が将来大東亜の建設には是非必要な学問であつて、日本の学生の誰かが会得しておく必要があるのである。固より諸君にその完全を強ひる訳ではないが、その心持ちだけを失はないでおいて貰ひたい、今や「不可能を可能ならしむる」秋だからだ、全学主義で進む機会であるからだ。

舟岡省五

17　出陣の日愈よ迫る　今日送る精鋭学徒　午前八時から本学壮行式

一九四三年一一月二〇日

時は秋、うまし国麗はしく山紅ゐに空すみわたり、われら男の子、廿歳の命を君国に捧ぐ日今まさに迫る、われらうまし国を守らん、われら祖国の難に生還を期せず、学徒の決意は弥が上にも堅く、敵撃滅の一念に燃ゆるのみ—

さて今や旬日後に迫つた光栄の日を指をり数へて待つ出陣学徒の首途を飾る数々の催しは臨時徴兵検査以前を第一期とし検査期間中しばらく中止されてゐたが八日の同学会出征記念旗掲揚式を以て第二期の幕をあけた、五日から廿日にわたるこの期間は徴兵検査の結果もわかり従つて学徒の決意も一入堅く今や生死に徹した心情にとつてはこの種の催しは殊更に感銘深きものがあつた

八日

出征学徒が学園と前線を結ぶ楔にもと残して征く出征記念旗の掲揚式はさる八日大詔奉戴のよき日、同学会主催のもと午後一時から西部構内池畔の掲揚台下に挙行、定刻原随園、牧健二、並河功、池田栄、井島勉、汐見三郎、谷口吉彦らの教官、同学会職員をはじめとして法経学部の出征学徒中約五百名参集国民儀礼ののち出陣学徒を代表して経三回生永見定三君「今後いかなる前線にあつてもこの吉田山麓にはためく日章旗に思ひをはせん」と力強く決意を披瀝、ついで待機学徒を代表して医三回生今泉博夫君挨拶をのべ、音楽部の伴奏で全員国歌斉唱裡に記念旗は中央委員の手によつてするすると晩秋のうすら寒い風にあふられて竿頭にかかげられ、はたはたと高鳴るのであつた、最後に聖寿の万歳を三唱、一時十五分散会したが征くものも留るものもこの大国旗を通じて脈々と高打つ学徒赤誠の心を新たにするところがあつた

十日

午後三時から法経第六演習室で学生課主催「南方を語る座談会」を開催、先頃ニューギニア視察を了へて帰学した農学部梶田茂教授および南方戦線から帰還

した三谷軍医少佐を中心として南方の気候、風土のみならず南方に関する重要事項について活溌な論議がすすめられ、五時すぎ貴重な収穫をえて散会した
夜は六時三十分から文化部主催で「能楽鑑賞会」が金剛能楽堂で開かれた、征途を前にして今一度わが古典の真髄にふれておかうとする学徒の望みはこゝに達せられ、堂をうずめる立錐の地なき盛況のうちに能楽中の絶品「松風」が金剛巌氏一門によつて上演されたがこれには既報のごとく金剛氏が最近入手された由緒ある古面を用ひられ、見もるのも演ずるものも国を思ふ至情の美しい糸に結ばれてまれにみる盛会であつた

十一日
同学会音楽部、映画部共同主催になる「学徒出陣壮行の夕」は午後六時から朝日会館で開催、堀場信吉教授（音楽部長）の送別の辞にはじまり、ついで朝比奈隆氏の指揮になる管弦楽を演奏
▽「プロメイトスの創造物」序曲（ベートーヴエン作曲）▽フルート協奏曲ニ長調（モツアルト作品）フルート独奏山田忠雄氏▽交響曲「第二番」（ベートーヴエン）
と曲はすゝみ、終つて映画に入り「空の神兵」ニュース映画「南太平洋海戦」「東都学徒壮行式」に征途への一層の熱情をわき立たせらるところがあつた、最後に映画部長木村素衛教授の挨拶があり閉会

十四日
この期間中の日曜にあたる十四日は秋空のもと各種の行事が絢爛と展開されたまづ法学部ではこの日をきして錬成大行軍を実施、午前八時法学部玄関前に全員集合、部長引率のもとに山中越で紅葉色づく志賀の里に出て近江神宮に参拝、出陣学徒武運長久祈願祭を執行、終つて晴れわたる近江路を宇佐山から眺望、秋くれゆく琵琶湖をめぐる風光の中で昼食をしたゝめ正午頃解散した、一方学生課では十三日から十四日にかけて法隆寺鑑賞会を挙行、十三日には午後一時から文学部八番教室で源豊宗氏が講師となり幻灯を使用し絵画、彫刻の説明あり、十四日には午前九時半法隆寺南大門前に集合元教授天沼俊一博士が講師となり法隆寺の「建築」について蘊奥を語り、更に夢殿、中宮寺にいたり秋色濃き斑鳩の里のあたり今なほ漂ひ残る飛鳥人の昔を偲び国土への愛を今更のごとく新たにしてこの有意義な会を閉ぢた
なほ航空部では午前八時四条大宮に集合大阪第二飛行場にいたり見学、一部は同乗飛行を行ひ、射撃部では学内壮行射撃大会を大谷射撃場で午前八時から挙行、各部とも秋の一日をみのり多く送つた
西谷、木村、高山の三氏をかこむ座談会は午後一時から法第六演習室で開かれた、参会者約百名、定刻まづ井上学生主事からこの座談会の意義について説明あり決戦下における諸般の問題を中心にして話し合つてゆきたに旨をのべ、なごやかな雰囲気のうちい高山助教授は決戦の意義について学生側からの質問に応じながら懇切に応答、時をうることの重要性を指摘、木村教授は学徒出陣のもつ意義の闡明を行ひ、学徒の誇りをもつて征くべきことを強調、ついで決戦下における学問の使命について学生側から質問が出たのに対し教官側からは平時と決戦下における学問のあり方について説明、学問の秩序が平時と戦時において変化してゐること、勝たんがためにはすべてを戦争に捧ぐべきであることを縷説、このまれにみる示唆に富んだ座談会は約三時間にわたつてつゞけられ四時十五分閉会した

十七日
特別講演「禅に就て」は鈴木大拙博士を招いて午後三時から法経第四教室で開催、まづ高山助教授の紹介の辞あり、ついで鈴木博士登壇、禅の歴史についての説明からはじめ如何なる過程を通じて禅が印度から支那を経てわが国に入つて来たかを闡明し、禅の本質について明快なる解答を与へ、禅が深く生活の実相と結びついた所以からわが国における生活との結びつきに深い造詣を示し、五時頃散会した

十八日

文学部学友会主催の壮行会は決戦下にふさはしく新入生歓迎会をかねて午後零時二十分文学部玄関前に集合、直ちに記念撮影にうつりついで学生集会所で昼食をしたため茂山社中の狂言を鑑賞三時ごろ散会した

二十日

法学部壮行大講演会

法学部では午後一時から法経第四教室で壮行学術大講演会を開催、牧、中田両教授の左の如き講演を行ふ

訴訟における真実　中田淳一

日本世界観の立脚地　牧健二

なほ有信会では午後五時から本部階上大ホール（仮閲覧室）で有信会壮行会をひらき晩餐をともにして文字通り学園最後の日を送る

18　征く学生におくる　「義」の戦ひ—大東亜戦の本質—

大槻正男

一九四三年一一月二〇日

老若、男女、貴賤、教育程度の如何をとはず、日本人の最も愛好して読む本は何と云つても講談本ではないか、と私は思ふものである。講談本などと云つて馬鹿にしてゐた西洋かぶれのした人でも、欧米諸国などに永く滞在してゐると、一番に講談本がよみたくなるさうである。それはどんなに西洋料理や支那料理の好きな人でも、日本人たる以上、お茶漬けで淡泊な御飯が食べたくなるのと同様であるといふのをきいたことがあるが私にもよくうなづけるのである。

我々には講談本はよみ易い、努力を要せずしてよめるといふ点もあるが、あぶら臭い欧米の文字ものばかりよんでゐると、講談本の取扱つてゐる「侠気」とでも言ひ表はすべき日本人独特の自己に執しない—自己を逃げ出した—淡々たる気魄に対し心の渇きを覚ゆるに至るのである。いふまでもなく、講談は主として封建時代に於て官権の所持者又は代行者等が、当時保証のなかつた弱い良民の上に加へた暴力に抗して、身をもつて良民を扶けかばはうとした侠客や浪人達の「弱きを扶けて強きをくぢく」侠気を主内容としたものである。日本人の血管の中には、此の、虐げられるものを黙視してゐることが出来ない強烈な侠気の血液が深く潜流してゐるために、かうした物語りに泣かないでゐられない強い感激、深い共感を共通的に覚ゆるのだ、と私は思ふ。英国にもロビンフッド物語りの如きものがあるが、到底我が国の講談に匹敵するものではない。我が国の封建時代は、或る意味からすると、強きをくぢき弱きを扶ける侠気精神が、奔流を成して万朶の花と咲いた時代であつたと云つてよいと思ふ。世界の何処に我が国の如くに、弱きを扶ける侠気精神が奔流を成して咲き爛れた国があるかまたかうした物語りに男も女も、老人も子供も共に感激と共感とを覚ゆる国民があるであらうか。

今次戦争における我が国の精神も当初満州事変、日支事変の段階においては未だ目前の直接的事象に如実の発露が妨げられおほはれて表面に顕現せず、覇道的な帝国主義精神ででもあるかの如く思はしめたふしぶしが相当存したが、大東亜戦争の段階に入り戦局の進むにつれ、世界の権力の所持者、米英から彼らの桎梏下にある何等保護のない弱少大東亜諸民族を解放し全東亜諸民族をして自主独立の国民たらしめやうとする我が国独特の侠気が奔流を成し来つたものであることが、次第に明出して来た、殊に最近開かれた大東亜会議がこの事実を火を睹る如くに瞭かにしたと私は信ずるものである。

侠気は、自己の利害や勝敗の公算を眼中に置かず、暴力下に呻吟する無辜の良民を坐視するにしのびない熄むに熄まれぬ「義」の心から身を挺して暴力行使の強者に立ち向ふ精神である。而してその精神には「義」は必ず「不義」に勝つといふ固い信念が必随する、青竹を割つたやうな理窟なしの必勝の信念である。

大戦（東）亜戦争のことを思ふと、よくもこんな無鉄砲な戦争を始めたものだと思

ふ。蕞爾たる日本が世界最富強の米英二国を相手に廻して戦ふのである。計数的には勿論、常識的にも、世界の常識では考へられぬ戦争である。しかし顧みてみると、日清戦争にせよ、日露戦争にせよ、その当時の我が国力からすると当時の支那及びロシアは夫々、今日の我が国力に対する米英の国力に劣らない大敵であつたのであり、矢張り当時としては世界の常識からすると無鉄砲きはまる開戦であつたと思ふ。しかも我々は完全に勝ち抜いて当時支那暴力の朝鮮半島への侵入をしりぞけ、ロシア勢力の東漸するのよく抑止することが出来たのである。

我々は明治維新以来、真に国運を賭した諸々の戦争に勝ち抜いて今日に至り、今や我が日本が、世界史上に於て担ふ真の使命であるところの、大東亜諸民族を、欧米諸勢力の桎梏下から救出して、自主独立の大東亜共栄圏の建設に進むべき段階に突入し、現在我々はこの光栄ある任務を担うて大東亜戦争を戦ひつつある。諸君は学業半ばにして国家緊急の必要に応じ、直接第一線に出陣して戦はむとしてゐる。敵米英は相手として不足のない強敵である。思ふ存分戦ひ抜いていただきたい。我に世界史的使命あり、弱者を扶けて暴力強者をくぢく「義」の戦争である限り如何に敵は強大であつても必ず勝つのである。この信念によつて強力に戦つていただきたい。

緒戦以来の我が軍の戦果はまさに世界の驚異である。今日の朝日新聞の朝刊に、第二次交換船帝亜丸で布哇から帰朝した人の一人が、真珠湾の爆撃を受けた当時、米人達は「日本の飛行機に独逸航空兵が乗つてやつて来た」と一般に信じてゐたと語つた記事が記載されてゐた。極く最近まで我々自身までもが、我が国の航空戦戦闘能力は、独逸等のそれには遠く及ばないと思つてゐたのである。然るに真珠湾の爆撃、マレー沖の爆撃、今度のブーゲンビル沖の爆撃等おそらく世界の常識では理解しかねる強さを発揮したのである。いつのまの発達か。世界無比な短日月進歩の発達である。

すばらしい奇跡的発達は、単に陸海軍の戦闘力に関してばかりではない。私共は最近まで自動車といふと米国製であつて、和製の自動車はダツトサンであり、ダツトサン程度の自動車しか出来ないもの、況して飛行機は舶来、尠くとも大部分の部分品は舶来ものであつて、我が国の航空機工業は単に組立て製造程度のものと思つてゐた。事実航空機製造工業の、やうやく緒についたのは近々、大東亜戦争開戦の直前であつた。その後の躍進的発達はどうであるか。単に質に於てばかりではない、量に於ても驚異すべき生産力に達して既に某々国などを遙に凌駕し、更に躍進をつけてゐるのである。私はよく地方を旅行する機会をもつてゐるものであるが、とんでもない所にとてつもない大きな重工業工場、軍需工業工場がすでに建設され、或は建設中なものを幾何みるかも知れない。また朝鮮、満州の各地方に於ても然り。日本の何処にこんな偉大な力が潜在してゐたのかと思はされるのである。満州事変以来、殊に最近の我が国の重工業及び軍需工業の発達は世界の誰もが、そして我々自身が夢想もしなかつた急激な驚天動地の躍進であると思ふ。我々は神風のすでに吹き来つて我を扶けてゐる事実を疑ふことが出来ないのである。かくて我々は前線の戦闘力を信じてよいと同様に、銃後の生産力を信じてよい。たゞもう一息といふところである。前線、銃後一塊の火の玉となつて敵米英の心臓部に体当りするならば、米英の強大、決しておそるるにたらない。我々は決して自国の打算に於て戦ふのではない。大東亜諸民族解放の、世界史的使命を遂行するために熄むに熄まれぬ大和魂に生きて、また強き暴力を打ちくぢいて弱きを扶ける日本人独特の侠気に生きて「義」のために戦ふ戦争である。銃後に残るものも力の限りやる。勇躍して頑張つていたゞきたい。私は斯く切願して諸君の出陣を送る。（一八・一一・一五）

19　出陣学徒壮行式　征け、顧みなくて　学園をあげて熱誠の壮行

一九四三年一二月五日

昭和十八年十一月二十日、さらば思ひ出の時計台よ、この日若き学徒は大君のため召されて秋深き学園を征で立つ、省みれば孜々として勉めし十有余年の学窓生活を今一歩にして征で立つ出陣学徒は日出づる国の誇りを胸に手には正義の刃をとり祖国日本の隆替を双肩に担ひながらなつかしき学び舎の門を去る、ああ、出陣学徒の胸の裡をかけめぐるものは征野のよぶ雄叫び以外の何物でもない、生きとし生けるものみな大君のみいくさに召され征でゆくとき学園より召され、祖国の歓呼に送られ歩武堂々学徒は征く、征く！地を揺がす足音、なびく真紅の学旗、今学徒は立つのだ、この日秋空高く晴れわたり、陽光おだやかに万象を照らし、ものみな鮮かに冴え渡る祖国の秋のうるはしきしゞま、仰げば朝夕見なれし比叡の山容も迫るがごとくさやかな大空に聳え立つ、まさに学徒出陣にふさはしき世紀の朝である、この祖国の美しき朝に勇躍征途につく学徒の相貌よ、衒気もなく誇張もなく、たゞそこにあるものは召されてゆく歓喜の充溢と戦列に伍した逞ましい面構へのみだ、粛々として並んだ隊伍の中からは目にはみえないが胸にひびく東亜の夜明けを知らす鼓動が脈々と伝つて来るではないか、未曾有の国難に敢然挺身する出陣学徒よ、健闘を祈るのみ

本学出陣学徒を送る壮行式は二十日午前八時半から本学農学部運動場で挙行された、八時までに出陣学徒及び残留学生は既に集結開会をまつ中松本学生主事の開会の辞に式ははじまり国民儀礼の後、音楽部の伴奏で君が代斉唱、総長の大詔捧読あつて後、総長登場

大東亜戦争開かれてよりまさに二年に垂んとし、戦局の現階段は率然諸子の出陣を促し

と冒頭して学徒出陣の意義、その責務の重大さ、米英における学徒動員の状況に言及

あはれ名もなき戦ひに動員される米英学徒に対し、忠義にこりしわが学徒の必ずや彼等を駆逐する事と信じて疑はないところである、然し血気の勇にはやる事なく、上長の命を奉じ、軽挙盲動をつつしみ、教養ある学徒の真面目を発揮せよ、皇国の聖業と世界新秩序は諸君の肩にある、ああ、ここに二千六百余年我が肇国の悠久の精神を発揮して世界の秩序を正し、人類史上未だなき聖業に参加する諸子よ、予をして嬉しさと頼もしさと有難さをここにくりかへさしめよ……さればかへりみなくて雄々しく征き給へ、神かけて諸子の武運長久を祈る

と温情徒(ママ)れる餞けの言葉を送れば、残留学徒代表医四回生福住一三君

われわれは出陣諸兄とおなじく既に学徒兵である、今日は諸兄を送る身であるがやがて兄等の跡を追ふてゆく身である、その日までわれらは渾身の力を傾けて心身の錬磨と学業に精進せん、よく尽忠の大義をつくされんことを

と壮行の辞あり、つづいて出陣学徒代表法三回生吉村敏夫君

われら生還を期せず、生ら今や剣をとり積年の精進研鑽のすべてを挙げてことごとくこの光栄ある任務に捧げんとす、ここにわれらを育み来つた学園と学恩に感謝を捧げるものである、われらは今大日本帝国の軍人として立つ、誓つて聖慮を安んじ奉らん

と力強い決意を吐露、終つて出陣学徒の分列式に移つたが、まづ法学部第一中隊から歩武堂々の行進はおこされ、ついで同学部第二、第三中隊、文学部、経済学部第一、第二中隊、農学部と続き、折から燦々と輝きわたる秋の日に照らされながら大地を蹴つて行進、ついで音楽部員の伴奏で一同朗々天地にひびけとばかり「海ゆかば」を斉唱、感激は最高潮に達する中に総長の発声で聖寿万歳を奉唱、落合文学部長の発声で出陣学徒万歳、最後に出陣学徒代表酒井君の発声で京都帝国大学万歳を唱へ式を閉ぢ、それより全出陣学徒は学旗を先頭に正門を通り平安神宮に向つたが、正門わきでは全教職員が拍手を以て学徒の壮

行をおくり、迫り来る感激に思はず涙を拭ふ姿をみられたのであつた、神宮では十時半から神前で必勝祈願祭を執行、同学会からの餞けの石清水八幡の御守り袋を送られ同十一時過ぎ解散した

なほ引続き法文経農の各学部では仮卒業証書授与式が行はれ部長自ら一人々々に授与するところがあつた

20 京都市主催 出陣学徒壮行会

一九四三年一二月五日

百二十万京都市民の餞け京都市主催出陣学徒武運長久祈願祭並に壮行会は去る廿一日午前九時半から平安神宮神苑において華々しく挙行された、本学はじめ立大、同大、龍大、谷大、高工、三高、絵専、仏専、高蚕、臨済学院、武専、京都専門等の出陣学徒は校旗かかげて続々式場に参集、定刻九時卅分祈願祭は寺田宮司祝詞奏上にはじまり、篠原市長、出陣学徒代表同大大坪君、出陣学徒学□代表羽田本学総長、河野師団長、京都市会議長の玉串奉奠があつて壮行会にうつり国民儀礼、君が代斉唱、詔書捧読、篠原市長の壮行の辞あり、河野師団長、新見舞鶴鎮守府司令長官、雪沢知事の激励の辞あつて出陣学徒を代表して本学酒井君の答辞、ついで「海ゆかば」「愛国行進曲」を斉唱、市会議長の発声で聖寿万歳を奉唱して式を閉ぢ、出陣学徒らは祝酒をいただき平安神宮の護符を受けて後、後輩学徒の打ち振る旗の波、万歳、歓呼の中を堂々行進散会した

21 神鎮る英霊十六柱 四日本学慰霊祭執行

一九四三年一二月五日

第二回目の本学慰霊祭は去る十二月四日午前十時から本部階上大広間において執行された、再び学園にかへり来つて神鎮る英霊十六柱は昭和十六年九月より十八年十月に至る二年間に護国の華と散つた本学関係者である

定刻前撤に教職員、学生一同着席来賓として京都師団長、聯隊区司令官、海軍監督官、三高校長、多数の本学名誉教授らも参列、式は斎主吉田神社宮司の修祓にはじまり、降神、献饌とつづき斎主諄辞斎

ついで祭主羽田総長の祭辞あり厳粛の気みなぎる中に祭主、遺族、職員代表、名誉教授代表、学生生徒代表、来賓代表の玉串奉奠が行はれ、終つて既饌、昇神の儀あり、羽田総長の挨拶あつて式を閉ぢた

英霊の芳名左の如し

有馬三郎（医学部職員）滝本秀夫（医学部職員）大塚博一（医院職員）前野武司（医院職員）富山勝（医院職員）伊藤俊三（医院職員）三輪輝夫（医院職員）石田武（工学部職員）田中正己（工学部職員）塩田均（工学部職員）谷井欣三（工学部職員）大平四郎（文学部職員）笠井研一（化学研究所職員）杉山清（営繕課職員）外に一柱

なほ当日は全学哀悼の意を表して授業を休止した

22 学徒壮行の模様を 百号の大作に 同学会

一九四三年一二月五日

別項荘厳極りなき中に学園を感激に包んだ出陣学徒壮行式の模様は絵画として永久に記録して、永く此の日を偲ぶこととなり、同学会では前本学講師で独立

美術協会の重鎮須田国太郎画伯にその製作を依頼したところ、深い感動の中に進んでその任に当るべきを約せられ近く百号の大作となつて壁間を飾ることとなつた、画伯は度々運動場に立つて周到な用意の下に南禅寺畔に画筆を執られつつあるが、その参考写真の製作は鈴鹿幸保氏が担当せられた、同氏は最近刊行せられた「能面」の撮影者として令名を謳はれた人であるが、壮行式の写真撮影為にはその前数日間同時刻に運動場に立ち光線の研究をせられる等渾身の力を振はれた、この写真は記念画の参考のみでなくやがて絵葉書にして頒布する案が立てられてゐる

なほ此の事業の成立については同学会美術部長の文学部井島助教授が入院中の愛児の看護を忘れて奔走せられた隠れた美談が秘められてをり当事者をいたく感激せしめてゐる、かうした幾多の熱情に彩られた大作を壁間に仰ぐ日も程近いことと思はれる

23　壮行式告辞　総長羽田亨

一九四三年一二月五日

大東亜戦争の開かれてより将に二年に垂んとする。緒戦以来皇軍の赫々たる戦果についてはここに改めてのべるを要しない。而して戦局の現段階は卒然として諸子の出陣を促して、一挙敵勢を撃破するの要を見るにいたつた。諸子は今や徴集の大命を畏み、勇躍軍伍に加はつて、敢然祖国のために戦はうとするのである。師弟としての情誼、国民としての感謝は、一言この華々しき諸子の門出を送るべき言葉なくしてやむ能はざるものがある。

親愛なるわが出陣学生諸子。諸子は本来学術をもつて国家に奉ずることを志し、孜々として勉めて今日にいたつたのである。修むるところは国家須要の学であり、養ふところは国民指導階級の識見徳性であつた。国家は実に諸子がこれをもつて君国につくし、その隆昌に寄与するところあらんことを期待したのである。豈はからんや、米英豺狼の飽くなき慾念と、増長せる暴慢とが、東亜の安定を紊し、皇国の存立を脅かし、つひに宣戦の詔の発せらるるのやむなきにいたらしめ、今日諸子をして業半にして奮然軍に赴くにいたらしめようとは。さりながら国民皆兵はわが国是である。事なきに当つて文事に携はるものも一旦緩急あれば義勇公に奉じ、決然筆を投じて戎軒を事とするは、もとより国民当然の覚悟であり、今や実にその時に際会したのである。身をもつて君国の安護に任じ、雄々しくも剣とり佩き今ぞ立ちいづる諸子の勇姿を前にしては、嬉しくも頼もしくも、また有りがたくも感ずるのである。日ごろ積み来つた修養により、諸子の覚悟は夙くすでに定まり、胸中おのずから成算あることはもとより信じて疑はないのであるが、それにしても、この際せめて一語をよせて固き覚悟の更にも固かれと祈ることは、余の当然の務めでありまた衷心よりの願ひでもある。

諸子、およそことに従ふものはその意義に徹することを最も肝要とする。今諸子が学園より召されて軍に赴くのは、国家がこの際単に一般兵員の充足を企図するがためのみではなく、実にこの征戦の現情勢下において別に学徒なる諸子の出陣を要する特種の事情の存するものがあるによることを、ふかく諒得しなければならぬ。諸子は今や学すでに成るに近く、識すでに高く、加ふるに訓練の効をつんで体と神とともに旺盛であり、今の極めて緊迫せる戦局において皇軍の最も充足を要する諸種大小の幹部として、諸子を措いて他に適者をもとむべからざることが、その最も大きな理由である。さればこそ国家は諸子が成業の後において軍務に服することを今日にいたるまで認めて来たにかゝはらず、今はその時をまつ能はずして、今次の措置にいづるのやむなきにいたつたのである。此のごとく、諸子の召されるのは、目下、一日も忽にすべからざる局面において、国家が諸子の上に重く寄託し、深く信倚するが故であつて、平時に当つて、世の指導者として諸子の力に俟つところが、国民の総力をあげて

軍国のことにつくすべき時局下において、更に強く戦陣の裏にもとめらるるのに外ならぬのである。この重大の時に当つて、かゝる重望を一身に負う諸子の栄誉や大なりといふべく、その責や又重しといはなければならぬ。諸子が今学徒出陣のこの意義に徹し、その栄誉と責任とを自覚して、各自奉公の上に励むならば、諸子の今日にいたるまでの心身の教養と鍛錬とは、おもふに見事にその効果を発揮し、必ず国家の期待にそふを得るであらう。敵米英にありては、いち早く多くの学徒を動員して軍に従はしめてゐる事は、諸子の聞知するところである。あはれ名もなき戦に、ただ物力に自負して暴慢跳梁する驕児の群に外ならぬ。崇高なる皇国の精神を体した諸子が、一撃かれらの心胆をうばひ、その暴慢を挫き、その自負を失はしめ、忠義に凝りしわが学徒の面目を発揮するであらう事はわれらの諸子に対して切に祈念しかつ信じて疑はないところである。

刃かざして陣頭に立つからはもとより生死を超脱して、必ず敵に勝つことを期せねばならぬ。さりながら、くれぐれも戒むべきは、血気の勇に逸つて、無益にとりかへし難い運命を招致してはならぬことである。君国のため、壮き尊き命の今日ほど軽んずべき時はないとともに、また今日ほど重んずべき時もない。厳たる軍規のもと、只管に上長の命を奉じて、如何なる難事にも敢然として当る間にも、常に慎重と沈勇とを発揮して、挙措進退度に当ることこそ教養ある学徒の出陣に、ふかく望みをかけられる所以である。真に国家興廃のわかるる重大事の今皇国の運命を自から双肩に荷へることをふかく覚悟して、進止いやしくも軽挙盲動することを慎しむならば、おそらくは諸子の負へる使命を達成する上において、過なきを得るであらう。

嗚呼、悠久の二千六百余年、今にして肇国の精神をさながらに発揮して、独り皇国の存立の為にばかりかは、広各(ママ)く八紘を以て宇と為し、人類をして各々その処を得しめ、紊されたる世界の秩序を正しきに反さうとするのである。皇謨真に正大、まことに人類の史上絶倫の聖業である。この一戦を外にして何を以てか米英積年の罪悪を膺懲し、皇国の安泰をはかり、東亜の妖雲を排するを得ようか。而して諸子今や大命を畏み、勇躍してこの聖業に馳せ参ずるのである。諸子の一人は来りて余に告げて「げにもよき時に生まれあはせたれ」とその感激を披瀝したのである、思ふにこの感激こそは必ず諸子の通有するところたるを疑はない。余をして再び諸子に対する嬉しさと頼もしさと有り難さとをくり返さしめよ。諸子の清く尊きこの心境の上にこそ皇国の永遠の隆昌と、世界新秩序建設の聖業は期し得られるのである。こゝに区々たる私情を去つて、喜び祝して諸子の首途を送らねばならぬ。

さらば征き給へ、親愛なるわが出陣学生諸子。後にのこる諸子の同学も、はやる心を押ししづめて、諸子と相携へて前線に立てる気構へのもとに、各々所要の学業を修め、やがて諸子の後につづくであらう。なほ要するならば、老も若きも、男も女も、およそ生を皇国に享けるもの、すべてが起つてさらに後につづかねばならぬ。一たび蹶然として立てる上からは、無道の敵にいやしくも屈服して、おめおめ辿るべき途の、わが国民の前には残されぬからである。白亜館裏城下のちかひを見るまでは、鞘に返らぬ剣である。

さらば、顧みなくて雄々しく征き給へ。神かけて諸子の武運長久を祈るのである。

24 学徒出陣を送る　終日忘れ得ぬその日　黒田正利

一九四三年一二月五日

昭和十八年十一月廿日、此日こそは我々京都帝国大学に学び或はここに職を奉ずる者に取つては終生忘れることの出来ない日とはなるであらう。それはまた京都帝国大学自体にとつても永久に記憶せらるべきものであつて、我が学史中特筆大書して記念されるであらう。即ちこの日本学多数の出陣学徒健児のため

学を挙つてその壮行の式が厳かに取行はれたのである。

顧みるに、本学が創設せられてより此のかた既に幾年月、その間に果してかくも荘重にして崇高、悲壮にして凛烈、全学徒の胸底より湧き返へる赤誠に凝つてそれが表現されて遂に儀式となつた、と言つて好いかうした儀式が有つたであらうか。我等の記憶には無い、学史の何れの隅にもかうした事実の記録は無論発見できない。当然のことである。

畏れ多くも曩に青少年学徒に対して優渥なる大詔を賜はつたのであつた。而して今、国家危急存亡の秋、国家の特殊なる要望と信頼とを負ひ、此等若き全学徒は身を擲して奮ひ起つに至る、これらの人々は将に身を以て国民英雄詩を作り、自らの行動を以て国民史を書かうとするのである。学徒としての誇でもあらう、男子の本懐でもあらう。しかしまた翻つて思ふに、彼等は我国家将来の発展のため輿望を負ひ、国家の選抜と保護の下に而して自らの幾多の試練と超剋とによつて、現に最高学府に夫夫専門の学芸に研鑽する学徒である。それが今習練の中途に於て惜くも学園を辞し、何物をも国家に捧げ、将に征途に就かんとするのである。我等同じ意図に同じ道にいそしむ者は、この意義深い出陣に対し殊更に強い感慨に迫られることは当然である。

壮行の式に際し、総長によつて為されたる烈々たる告辞は学徒出陣に関する意義と責任に就いてよく事理を尽し、また我々の言を用ひることを要しない。然も声涙共に下るその言々句々、若き学徒の上を思ふ切なる情、その人達に致す心からの厚感謝、それは同時に借りて我々送る者の衷心よりの餞の言葉でもある。またわけても出陣学徒によつて国家に応へ学園に誓つて述べられた棄私向公の健気なる決意は、洵に肺腑に徹し秋霜烈日の至誠といふべく、私は思はず襟を正し厳粛そのものに打たれた。

而して見れば神々しいまでに照り映える若人達の顔！顔、勇ましくも雄々しいその姿。如何なる敵、如何なる困難をも克服しないでは措かないであらう。国民の悲願は必ずや達し得ることを約束するものと思はれ、ひたすら感激に顫ひ、感謝の念に溢れ、遂に私の眼頭は熱くなつた。そして唯武運の長久と大任の遂行を念じたものは固より私一人だけではなからう。あの知性に澄み切つた眼に、引緊つた顔に決意にふくらむ胸に、而して逞ましい両の肩に、思へば国家運命の秤が托されてあるのだ。我等民族の興廃と歴史の創造があの均勢のある体躯に繋つてゐるのだと思へば、昨日までの教へる者と教へられる者、導く者と従ふ者、師と弟、さうした係りも忘れて在るものはただ学徒兵の尊い姿である。

とは言へ校門を後に出で征く若い同行の後姿をつくづく見送るについても我等後に留らざるを得ない老いたる者の愛着の情は綿々として尽きない、だが大義に就かんとする彼等学徒兵である、欣んで送らなくてはならぬ、大義は総てを超えて肯定する。我等は平生真理の追求といひ精進といふ、しかし国家を離れてはそれは所詮は無意味なことだ。然るに彼等は国家特別の要請に応じ、国家死生興亡の秘鑰を托され、大東亜の建直しに直接に参□し新たなる歴史そのものたらんとしてゐるのである、人としてこれに優る生甲斐が何処にあらう、我等は満腔の敬愛と祝福とをもつて決勝戦に征く、彼等を送らなくてはなるまい。それにしても、彼等が何気なく投げて行つた言葉や残して行つた片影が、ちらと私の頭の中をかすめて過ぎる。さきに政府から突然発表された学徒総出陣のことは、早かれ晩かれとは予ねて覚悟はしてゐたことであるにしても、彼等に取つては突差のしかも重大な出来事であつたに相違ない。軍関係を始め朝野の殆ど各方面からは、それら学徒に対して此度出陣の意義と重大性と決意と激励と要望を遺憾ない迄に述べられて来た。だが彼等は極めて静平を保つた、それは事に無関心であるがためではなかつた、現実の事態を深く察し、自らの訓練と指導力とを持ち得たからである。自ら誇り阿り慌てることをしない、唯「我等は戦ふあるのみ」と静かに言葉短かに答へるのである。出陣を目前に見詰めながらなほ講堂に列らなり読書に目を曝らす姿を見なば、世人は、両親は如何に思つたことであらう。慌しさの間の一時の無聊を消すためではない。学園になほ保留されてある僅かの静思に別離を惜んでゐるのである。

「一体西洋人と東洋人の世界観の根本的差異は何処にあるのだ」突然かう尋ねてゐる者がある。而かも見よ、倹素極まる食卓にノートの蔭に読み耽つてある書物が「真珠湾攻撃」であらうとは。著者はこの一人を獲ただけで冥加とするであらう。余りに温和に過ぎることを気遣はせた一人は「第二乙とは残念だ、ウンと食つて行つたのだが体重が少し足りなかつたんだ」もう不屈な敢闘心に燃えてゐるのである。或問題に苦んで陰鬱に押篭められた後、朗かな笑をもつて第一乙種合格を報告してゐる、しかも直立不動の姿勢にて偶然乗り合はせた二人の検査帰りの学徒は嬉々としていも弁当を分ち乍ら心を割つて談笑するは永年に亘る親しい戦友に他ならぬ。

試みに彼等に挨拶するに「この度は御苦労様です」と深い意味を籠めて言へば「いやあ」とさも事もなげに答へるのである。白刃の下なほ虚なる心ともいはうか、虚なるは内に盈つるが故であり朗かなるは自ら信ずるところ強いからである。さればこそ、洛外に行軍する者が閑寂晴明の自然に一木一石になほ詩魂を遊ばしめる余裕さへ持つのである。錬成し来つた幾年の知性と道義と体力と、願はくは今この時遺憾なく発揮せよかしと、祈つた。この感銘と感謝とを私は何時迄も心に留めなくてはならぬ。明日は待たれたであらう十二月一日である、心から出陣学徒兵の武運長久を念じる。

25 壮行式　須田国太郎

一九四三年一二月五日

黒づくめの制帽制服に身をかためた、我京大学徒出陣隊が大競技場に勢揃ひして今日壮行式に移らうとする光景は正に全学の緊張この一瞬に集まるといふも過言でなかつた。比叡の秀峰、遙かに北山の連山は次第に朝暾から抜け出しつつある、間近かの赤い民家の屋根に黄葉した立ち樹が紫の影を宿してゐる。紅白の、幕の中央に一段高く白布につつまれた壇上に総長が上る、朝の冷気に号令が入り乱れて、また再び水を打つたやうな静けさにもどる。総長の送別の辞、マイクが山彦して一齣々々肺腑を衝く、残留生代表の壮行の辞、出陣代表の答辞、これにつづいた分列行進、いづれも沈痛なる悲壮そのものである。征くべき学徒は、戦場へは軍人としてあらはれるのであらう。けれども、ここでは学生のままで既に戦ひの野に一歩を踏み出してゐる。国家有用な学の完習を俟たずして去るのである。ここに国家非常の様相が如実にみられるのである。学生は業半ばにしても召さるべき場合あるを常に覚悟してゐた。それが今来たのである。武人が武人としてではなく、武人としての学生を我々は、この壮行式に於てみてゐるのである。そこには何等の華々しさはない。黒い学生服が一塊となつて行進して行く。緑、紫、青などの部類の小旗が隊の区切りをつけるだけだが、若き魂の一団となつて校庭から流れ出てゆくのを覚える。国家艱難に対する一層なる決意をこの壮行式によつて固めるのであつた。

26 台湾学徒出陣壮行式　九日　平安神宮で挙行

一九四三年一二月二〇日

皇国民の誇り高らかな台湾学徒陸軍特別志願兵の出陣壮行式はさる九日午前十時半から台湾教育会、関西台湾協会主催のもと平安神宮神苑で厳かに挙行された、定刻、台湾総督府西村文教局長をはじめ中部軍司令官、京都府知事、本学総長代理らの来賓列席、まづ寺田宮司奉仕して武運長久祈願祭を執行、引続いて神前広場で壮行会にうつり、国民儀礼ののち西村文教局長詔書を捧読ついで長谷川総督の壮行の辞を代読

過去数年、学びの庭の内地学友ら先輩が血の凱歌を前線から齎らして来たのを、君らは胸を叩いて扼腕したことであらう

大詔奉戴して二年、ここに輝かしい恩命により全台湾の輿望を担つて出陣するを得る諸君の眉宇に深く期するの決意を見て、その胸中もまた察するに余りあり、征け皇国民の光栄に生きて

と祝辞を贈り、更に来賓及び在住学生代表らの壮行の辞がおくられ本学法学部三回生陳光熙君志願学徒を代表して烈□殉国の決意をのべ、同十一時半感激の裡にこの意義ある式を閉ぢた

27　勤労奉仕　寒風の中、土に挑む　十日から湖国へ増産援兵

一九四四年一月二〇日

〝残留学生また戦へり〟法文系学徒を戦陣におくり既に一ヶ月をへた本学では学期あけの十日早くも滋賀県の要請のもとづき増産援兵として報国隊を出動、寒風吹きすさぶさ中土と闘ふ増産完遂に総進撃の鍬を揮つた今度の奉仕は前期と後期に分れ、前期は十日から十九日まで後期は本二十日から二十九日までとなつてをり、前期には文学部各回生医専一、二回生合計二〇八名が文学部松村助教授松本学生主事に引率され出動後期は法、経各回生が出動するが場所は何れも滋賀県野洲郡篠原村小南、大篠原、小堤、兵主村、六条、井口、堤、中州村、吉川、小津村杉江及び野洲町竹生の一町四個村にわたつてゐる、作業は連続十日間の宿泊によつて行はれ、起床は毎日六時半、点呼宮城遙拝、黙祷、体操の後七時から食事、八時から十一時半まで作業それから一時間の昼食で此昼食は兵主村を除いては作業現場で行はれ十二時半から四時半まで再び作業、四時半から一時間民家で入浴六時から七時五十分まで休養時間この間に座談会等の催しが行はれ七時五十分から八時までに点呼消灯となつてゐる

宿泊場所は附近の公会堂、寺院が利用され、作業の種類は用水路区画整理、客土、暗渠排水、溜池底堀、藁土、農道改修、開田、排水路修理などの食糧増産のた[ママ]の土地改良作業である

前期出動報国隊は到着当日それぞれの町村の氏神神前において厳粛裡に入所式をあげ敢闘を誓ひその翌日から作業に従事したが請入側の地元町村でもこの増産援兵の中にまだ[ママ]つてそれぞれ活動するとと[ママ]も兵站部を受もち両者一個となり多大の成果をあげるところがあつた

なほ後期出動の法、経各学部は十八日午後三時にそれぞれ集合学部長より今回の奉仕重要意義を指摘、諸般の注意を与へるところがあつた、とくに今回は欠席は学部長の承認を要することになり、また留学生も共に同甘共苦の敢闘を誓ふところがあつた

28　学徒出身兵を視察激励　総長ら舞鶴中部各部隊へ

一九四三年二月五日

学徒出陣を送つてからも早や二月に垂んとするが、この間議会においては学徒兵の烈々たる忠誠心、その成績良好なるものあることが発表され、欣然死所を求めて征途についた学徒兵への期待ますます大なるものがあるが[ママ]、本学ではかねて軍当局と緊密なる連絡をはかり本学出身の学徒兵激励の方法を研究中のところ、まづ渡辺法学部長、ほか各部長、松本学生主事が浜島大佐に伴はれ京都師団を訪問したのを皮切りに去り[る]廿三日朝には浜島大佐引率のもの[ママ]とに大杉農学部長、法学部田中教授、梅原文学部教授、経済学部柴田教授、松本学生主事が舞鶴海兵団を訪ひ本学出身学徒兵の逞ましい海軍生活の一日を見学座談会を開いて親しく慰問激励したが、学校側からは学徒兵待望の本紙を手土産として持参、久し振りにみる本紙に大満悦の体、残留学徒、理工科系学徒の状況、学徒兵の母校後輩への希望など話はつぎからつぎへとつきるところなく続けられ、浜島大佐の激励の辞あり学徒らの漕ぐカッターで送られて感激のうち、舞

鶴発帰洛した

廿九日には羽田総長をはじめとし専田、浜島両大佐、松本、山本学生主事らが京都師団管下の学徒兵視察激励会の中に入つて午前九時から中部三十七部隊、午後二時から京中部四十部隊、四十三部隊の学徒出身兵の教育状況を視察したまづ原部隊長総指揮、岡田中尉の誘導による教練が開始され、各個戦闘教練、小銃、経機の擲弾、手榴弾投擲などの猛訓練、ついで機関銃の分隊戦闘基礎動作や〇砲の陣中進入および射撃綜合訓練に移り学徒兵の逞ましい意気を実地に視察、かつて身近にあつた教へ子達の見違へるやうな凛たる姿に瞠目したのであつた、かくて十時四十分から廿分間の面会時間が与へられ羽田総長は本学出身兵の前に立ち温情あふれんばかりの激励の辞を与へるとともに、学徒兵の希望をきき「大学新聞は発行毎におくつてやらう」など互ひに笑顔でなつかしの一刻をすごし、また専田大佐は「みんな手を出してみろ」と教へ子たちの凍傷や血のにじんだ手をウム、ウムとうなづきながら眺めやるのであつた

ついで同十一時十分から正午にわたり部隊にかへつて各学校関係者と京都師団、部隊側との間に種々意見の交換をかさね学校教練と軍隊教育との連絡をより緊密ならしめる上に多大の収穫をえて終了した

29 報国隊第二陣出動 烈々、戦線に続く気魄

一九四四年二月五日

滋賀県下における食糧増産計画の一部として着手せられた農地改良工事に対し、同県から発せられた在洛各学校学徒三千名動員の要請に応へ本学報国隊の出動が命ぜられたことは既報の通りであるが、隊員はそれぞれ各隊附教官の指揮の下に文字通り風雪の二十日間の奮闘を了へて元気一ぱい二十九日全員無事帰学した、今回の出動は法学部一五二名、文学部四三名、経済学部一二五名、医専一六五名合計四八六名で湖東野洲篠原を中心とする小南、大篠原、小堤、六条、井口、堤、野田、吉川、杉江、竹生の諸字に分属した、宿舎は概して寺院が多く日課は午前六時半の起床に始り朝礼朝食を了へて八時の作業開始とともに伊吹颪と比叡颪の交錯する耕地や溜地の土に挑み、霜融けの泥濘に円匙を振ふもの、泥土をトロッコで運ぶもの、中には氷を破つて二尺に達する水中に入つて排水工事に従ふもの等文字通り前線につづく気概のもとに作業が続けられ、四時終業は時として延長せらるるなどあますなき敢闘がつづけられ夕食入浴の後九時点呼消灯といふ日課であつた、机をならべた友を前線に送つた学徒の気魄は、その厳正な規律ある行動とともにいたく現地の農民の胸を搏ち予定以上の作業の遂行はもとより精神的に現地に与へた刺戟の大きさは当局者から心よりの感謝を捧げられたのであつた、一方かうした勤労の間には貫ひ風呂に数名づつ農家に出かけカンテラの火の下の入浴を終へて渋茶をすすりながら心づくしの煎豆に古老の話をたのしみ、産米供出や組合の運営談等戦時下の農村の生きた学問を身につけるなど数々の収穫を齎したのであつた

この出動の成果について学生課を訪ねると陽灼けした頬を輝かしながら学生主事や主事補の諸氏はこもごも次のやうに語つた

厳寒の只中作業は慣れないものにとつては相当に難渋なものであつたが烈々たる気魄はよくその困難を克服し作業は飽くまで積極的であり行動はどこまでも規律正しく決戦下の学徒の真面目を発揮したのは欣快に堪へぬ、この結果が予定以上の能率を挙げたことは勿論、精神的に地方に与へた影響は大きく、地元の人達の間にあつた感情のもつれを解消させたやうな話まで耳にしたことは何よりのことであつた、殊に、各学部の教官が率先陣頭に立たれて学生とお寺の本堂に起居をともにせられ親しく与へられた指導の成果に対しては感激のほかはない、奨来この種の出動に対して現地との間になほ研究を要する点がないでもないが、学徒の気魄が一切を解決して行くほどに昂揚せられてゐることは病気その他の事故の少かつたとともにこの上ないよろこびである

なほ学生課では今回の出動の検討と奨(将)来への示唆と用意のために関係教官学生の代表の参集を求めてさる二日西部構内畳室に懇談会を開き種々研究するところがあつた

30　残留学徒の応援出動

一九四四年九月一日

法・経・文三学部三回生全員は九月卒業までの機関を××製造所へ挺身作業中であるが、去る十三日の日曜日には学園に残留中の法一回生も全員自発的に同製造所を訪ねて先輩を慰問し合せてこの一日を応援奉仕し先輩ならびに所員を感激させた

また経済学部全教授も谷口学部長を部隊長に、同日同所に出動して動員学徒を激励、灼熱の残暑のうちに八時から五時までまる一日汗を流して、教授陣として勤労奉仕のさきがきをなした

なほこの二つの応援は今後も、日曜を利用して、引きつづき実行されるであらう

31　西に東に適性分散出動　京大法・弱体学徒を落下傘的配置

一九四五年六月二一日

先に学徒総蹶起大会を開き「我等に最難の部署を与へよ」と未曾有の国難に処する学徒の血の叫びを天下に表明した京大では大会を契機として各学部有志の間に積極的な運動の推進が議せられ活溌な動きを見せてゐるが、中でもその主流をなす法学部ではこの決意を現実の職域、地域に於て実践すべく残留学徒すべてが勤労動員に出動することになり去る四月の新学年を期して適性分散配置についた

法学部では黒田学部長の下、決戦教育措置要綱によつて一箇年間の授業停止が決定される以前に従来弱体の故を以て勤労を免除され学園に残つて受講してゐた所謂残留学徒に対しても勤労出動が議せられ各々その適性に従つて能ふ限り戦力に直接寄与する実践活動に入る方針を決定してゐたが、これと学生側の希望が一致、その結果適性分散動員といふ画期的な動員計画が実行に移されることになつた

四月九日学部の壮行式において純潔の至誠を以て祖国の危難克服に挺身する決意を固めた学徒は抱負と希望に燃えて左の如く東に西に相去り相別れた

(一)　比較的健康に自信のある十名は石川県〇〇工場に挺身、そこに働く学徒の勤労管理に専念しつ側ら生産管理、工程管理にその智能と情熱を傾け直接軍需生産増強に邁進

(二)　京都市内に於いては裁判所検事局に八名、支庁に十四名が出動、官僚主義の宿弊に一脈清新の気を注入せんと期してゐる

(三)　大学内では教授の研究補助、研究図書の整理、又勤労事務の処理に当るもの五名が学内勤労班として残留

(四)　地方分散―健康に恵まれない者で家郷にあつて療養しつ側ら自分に適した職場を得て動員目的達成に邁進する画期的な前人未踏の企てで配置先は実に多種多様で、一例をあげれば運輸省、府庁、県庁、役場、税務署、警察署、農業会、商工経済会、各種統制組合、軍需会社、中学校、農学校、新聞社等多岐に亙つてゐる

これらの動員の中核となる本部ではその精神的郷里として各配置先へ絶えず激励を慰藉を与へる仕事を担当、学内班がこれに当り、連絡会を開き、或は連絡雑誌を発行する等の試みによつて通信連絡を頻繁に行ひ、分散配置の意義と成果を高める様努力してゐる

これには更に黒田学部長以下、勤労委員を中心とする学部教官が絶えず温い愛と理解、期待と激励の眼を以て支持を与へて居り、とかくの論議や批評に耳を藉さず、ひたすら自らを銃後戦線の兵として、又国内思想戦線に於ける落下傘部隊と自称して黙々自己の信念を貫かうとして居り、京大法学部の動きは単に適性配置といふ学徒動員の重大観点からのみならずあらゆる意味で注目すべきものを投げかけてゐる